く、果実類は事務的従事者世帯が最高、田畑作、畑作世帯が少ない。年次別の増減をみると市部では21年が最も高く、28年まで漸減し29年から再び僅かながら増加傾向がみられるが、郡部では28、29の両年がやや低かつたほかは著しい差はみられない。

(8) 漬物

市部では前年に比べて16.1%の増加をみせたが、郡部では僅かながら減少し、全国平均においては6.6%の増加となつている。なお従来はその摂取量において常に郡部が上回つていたが、31年度は逆転し市部が僅かながら上回る結果になつた。

業態別で多かつたのは林業、漁業世帯で逆に低かつたのは特殊農業及び畑作世帯である。

(9) 海藻類

前年より若干の増加をみせているが地域別、季節別摂取差は殆んどない。業態別には畑作世帯の10.2gが多く、特殊農業世帯の2.4gが少ないほかは大差がみられない。

(10) 調味嗜好品

醤油は市部、郡部とも逐年僅かの減量をみせているが、その他の調味嗜好品にあつてはかなりの増量となつている。なお醤油は例年のとおり郡部が多く、嗜好品類は市部特に事務的従事者世帯に多くなつている。

3. 栄養欠陥(身体症候)

前年度に比べて貧血(2.6%)、毛孔性角化症(3.1%)はやや増加し、口角炎(5.4%)は変化はないがビタミンB₁欠乏症候とみられるけん反射消失(9.1%)、浮しゆ(2.8%)及びはい腸筋圧痛(5.3%)がかなり増加しており前述の栄養摂取状態を裏書きしている。なおこれらの栄養欠陥を一つ以上有する者の数は全国で被調査者数の22.6%、市部19.0%、郡部26.2%で依然として栄養欠陥は郡部に多発している。

郡部が市部に比べて著しく多い症候は口角炎、けん反射消失及びはい腸筋圧痛で、これらは糖質過多と良質蛋白質及びビタミンB₁、B₃の不足によるものと思われる。年令別、性別にみると貧血は女子に多く年令の増すごとに増加しており、口角炎は5~14才の年齢、殊に当該年令の男子に多く、郡部では今なお児童の10%以上が罹患しているとみられる。(最高を示したのは郡部の5~9才の男子の11月で17.0%を示した)。毛孔性角化症は10~39才の女子に多く5%以上が罹患しているとみられ、けん反射消失、はい腸筋圧痛、浮しゆは年令の増すごとに増加し女子に多い。

年次別にみると戦後の極端な食糧の不足時代には貧血、角膜乾燥、浮しゆ、除脈等が多かつたが3~4年を経過するにつれて漸減した。その他の疾患については一定の出現率を示しそれ以降はあまり減少を示さないのみか反つてB₁欠乏症候については増加をみせている。

血 圧

最高血圧 最高血圧平均値は、僅かながら男女の差が認められ、20~24才までは男子の方がやや高いが、45才以上になると女子の方が高い傾向を示している。その間は殆んど差はない。血圧分布は女子の方が極めて広くばらばらである。市部、郡部別平均値の差は明らかでない。業態別の差は、例数の少ない業態もあつて一様に判定することは不可能であるが、比較的例数の多いものを比較してみると、筋肉労働をしている田畑作者、畑作者の方が事務的従事者よりも一般的に高い傾向を示している。

最低血圧 最低血圧平均値は、一般的にみて、男女差は明らかでない。大体 20~24 才の 70 を起点として年齢の増加とともに増大する傾向を示しているに過ぎない。市部、郡部別、季節別（5月、11月）の差も明らかでない。しかし、業態別にみると、筋肉労働を主とする業態者が事務的従事者よりも、一般的に高い値を示しているようである。男、女の血圧分布差は明らかでない。

脈 は く

各年齢階級別ともに女子が明らかに男子よりも多い数を示している。しかも 12~14 才の一部の女子の 80 台を除くと、各年齢階級すべて 70 台の数を示して変化がない。職業別差、季節的変動等はいまだ明らかでない。

歯牙異常

全国において欠損歯を持つものの数は 5月、11月の 2 回の調査を通じて男子 35%、女子 43% をやや上回り、一人平均の欠損歯数は男子 8 本、女子 10 本となっており、う歯を持つものの数は概数にして男子 66%、女子 70% 程度で 1 人当りの本数はそれぞれ 5 本程度となつている。すなわち男子よりも女子に多いが市部、郡部の間には著しい差は認められない。年齢別にみると欠損歯を持つものの数は年齢の進むにつれて増加し、40 才以上では 80% 以上にわたるが、1 人当りの本数にあつては 2 才以上 24 才まで殆んど差がなく 2~3 本であるが、40 才以上になると 13~14 本に及んでいる。

う歯は 5~9 才に多く男女とも 84% を越える状況であるが 25~39 才も多く、そのほかは大差はないがいずれも過半数にわたつている。1 人当りの本数は 5~9 才と 25 才以上が多く 6 本程度、他の年齢にあつては 3~4 本となつている。

4. 体 位

戦争終了前後に著しく低下した国民の体位は逐年回復の一途をたどつてはいるが、回復状態は年齢により著しく相違を示していることは、さきに当省が刊行した戦後 10 年国民栄養報告書によつて明らかなるところである。即ち幼児期に食糧難を経験した者程その被害は激しく回復も遅れていることが判明したが、31 年度の結果をみると郡部を除くほかはほとんど回復をみるに至つた。

しかし 14 才の男子の身長及び体重並びに老壮年の身長、体重は依然として基準値より低位にある。又若い女子の体重が基準値よりも高いが 30 年度よりは下回つてはいることは奇異である。なお前年度基準値以下であつた男子身長の 15、17 才と基準値と同位にあつた 16 才及び女子では 14 才と基準値と同位にあつた 15 才、体重では男子の 15、17 才及び 22 才はいずれも昭和 31 年度にはこれをこえるに至つた。市部と郡部を比較すると身長にあつては全年令層を通じて男女とも市部が優位にあり、基準値を上回るまでに至つたが、郡部の青年以後の年齢層にあつては依然として未回復の状態におかれてはいる。体重では男子では 0~17 才、女子では 0~16 才までは市部が、男子の 18 才以上及び女子の 17 才以上（18、22 才を除く）39 才までは概して郡部がすぐれている。

胸囲では男子の 6 才以下及び女子の 5 才以下は市部がすぐれ、男子の 17 才以上及び女子 16 才以上にあつては郡部がいずれも優位にあるが他の年齢層では不定である。

座高では女子の 20 才を除く外は男女とも各年齢層を通じて市部が上位にあり、上腕囲では男子の 17 才以下（11 才を除く）、女子 12 以下は市部が、男子 18 才以上、女子 13 才以上（15 才を除く）では郡部がま